

2022. 9. 25 (日) 使徒4:15~22

4:15 彼らは二人に議場の外に出るように命じ、協議して言った。

4:16 「あの者たちをどうしようか。あの者たちによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムのすべての住民に知れ渡っていて、われわれはそれを否定しようもない。

4:17 しかし、これ以上民の間に広まらないように、今後だれにもこの名によって語ってはならない、と彼らを脅しておこう。」

4:18 そこで、彼らは二人を呼んで、イエスの名によって語ることも教えることも、いっさいしてはならないと命じた。

4:19 しかし、ペテロとヨハネは彼らに答えた。「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。

4:20 私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」

4:21 そこで彼らは、二人をさらに脅したうえで釈放した。それは、皆の者がこの出来事のゆえに神をあがめていたので、人々の手前、二人を罰する術がなかったからである。

4:22 このしるしによって癒やされた人は、四十歳を過ぎていた。

<説教>

使徒ペテロとヨハネの二人が、エルサレムの神殿で被告人として裁判にかけています。裁判所はユダヤ人の最高法院（15 節欄外注）・サンヘドリンです。告発者は、その最高法院の議員たちで、その中味は、祭司たち、宮の守衛長、サドカイ人たち（1）、民の指導者たち、長老たち、律法学者たち（5）、大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレクサンドロと大祭司の一族（6）といった面々でした。二人はこれら敵意ある大勢の人々に取り囲まれて「お前たちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問されました（7）。「あのようなこと」とは、神殿で、生まれつき足の不自由だった人をナザレのイエス・キリストの名によって立たせ、歩けるようにしてあげたことです。更には、二人がイスラエルの民に教え、イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていることも、死者の復活を認めないサドカイ派の議員たちには気に食わないことでした（1）。律法学者らのパリサイ派の議員は死者の復活は認めていました。しかし彼らもイエスに対して反対していました。要するに、使徒ペテロとヨハネの二人を裁判にかけた人たちはナザレ人イエスが、イエスの名が気に食わなかったのです。イエス・キリストのことが人々に教えられ、イエス・キリストの名で物事が行われることが気に入らなかったのです。そのことは今日の箇所 17,18 節でも明らかです。

しかしそんな大勢の人たちに取り囲まれて、厳しい言葉と表情で尋問されてもペテロとヨハネは少しも動じませんでした。聖霊に満たされたペテロは聖霊に導かれ示されるままに聖霊の力によって、議員たちの反発をくらうのを覚悟で、しかし恐れず、ナザレのイエス・キリストの名で正々堂々と答えました。その言葉と態度があまりにも大胆であり、また二人が無学な普通の人だったので議員たちはとても驚いたのでした（13）。そしてナザレのイエス・キリストの名によって癒やされた人も証人としてその裁判の場に出ていました。大胆に堂々とイエス・キリストを証した使徒ペテロとヨハネ、またその存在をもってイエス・キリストを証したこの生まれつき足の不自由だった人。彼らのうちに住まわ

れる聖霊が、聖霊によってともにおられるイエス・キリストが彼らの力でした。

このように、議員たちは意気込んで尋問したはいいけれど、二人から返ってきた答えには返す言葉もありませんでした。しかし何とか自分たちが考えるように、自分たちの思い通りに結果、判決を出さなければなりません。そしてユダヤ人の権力者としての威厳を保ち、面目を保たなければなりません。彼らは二人に議場の外に出るように命じ、協議しました(15-17)。「あの者たちによって著しいしるしが行われたことは否定できない」と言います。「しるし」とは「証拠としての奇跡」(欄外注)です。何の証拠か?それは「(自分たちが十字架につけて殺した)イエス・キリストが目には見えないけれども復活して、生きていて、力をもってわざを行っている」という事実の証拠です。でも、ユダヤ人最高法院にとって、まさにそのことだけが絶対に認めたくないことでした。それでも「これ以上民の間に広まらないように、今後だれにもこの名によって語ってはならない」と命じ脅すことしか思いつきませんでした。自分にとって、また自分たちの仲間にとって都合の悪いことがほかの人に知られないように、誰かの口封じをすることはけっこうよくあることかもしれません。しかしそれもやっつけていいことと悪いことがあります。彼らサンヘドリンのした口封じは悪いものであり、決して従ってはならないものでした。なぜならもしそれに聞き従うなら、神に聞き従うことにならないからです。

それでペテロはまたもや堂々と、大胆に、はっきりと答えました(19,20)。裁判されている側のペテロが、裁判しているほうに対して「正しいかどうか、判断せよ」と迫っています。しかも大事なことは、それが「神の御前に」どうか、ということです。「私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」(20)と言うときペテロは自分たちが神の御前に置かれているのだということをはっきりと自覚していました。自分たちの前には目に見える人間として、また社会の秩序維持制度としてのユダヤ人最高法院という権力がある。しかしその更に上には神がおられる。主イエス・キリストがおられる。そのことをペテロははっきりと正しく知っていたのです。最高法院こそは本来「神に聞き従う」所、神に聞き従って判決すべき所だったはずなのに、彼らも口では、建前では「神に聞き従う」と言っていたはずで、「神に聞き従うよりも人間に聞き従うほうが神の御前に正しい」などという判断をこれまでもあなたがたはしてきたのか、と痛烈な批判というか皮肉というかでペテロは答えました。

またまた議員たちはペテロに反論できませんでした。二人を罪に定めることができず、できることはただ「さらに脅したうえで釈放」することでした(21)。更に脅されるというのもまああまり気分のいいものではありませんが、ペテロとヨハネは最後まで堂々と脅しに屈することなく語ることができました。

これも続けて聖霊の力でした。たとえどんなに無学で普通の人だったとしても、聖霊に満たされたペテロを通して神が、主イエス・キリストがお語りになったていたのです。そしてまたここにあの「癒やされた人」が出てきます。彼もまた「自分が見たこと聞いたこと」、主イエスが「自分にしてくださったこと」をその存在によって語るイエスの証人として必要なところで用いられたのです。彼にも金銀はありませんでしたが、イエス・キリストがうちに住んでおられました。イエス・キリストを信じている私たちも同じです。イエスの御霊、聖霊の力によって神に従い、「自分たちが見たことや聞いたこと」を証ししていきたいと願います。

